Ⅶ　提言

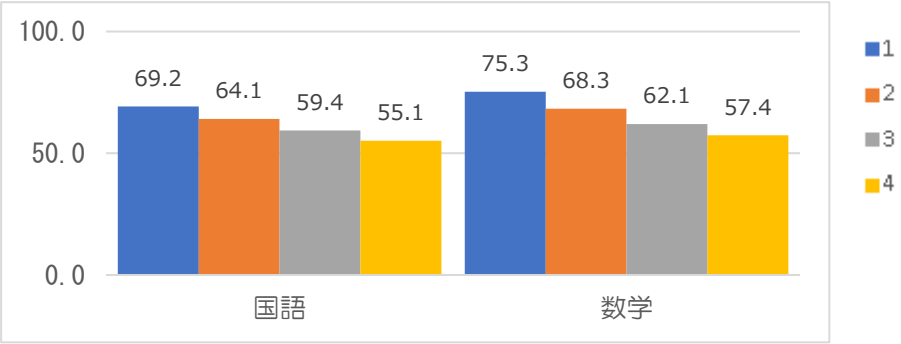
1　質問紙調査の分析から

児童生徒質問紙と学力のクロス分析

【小学校】

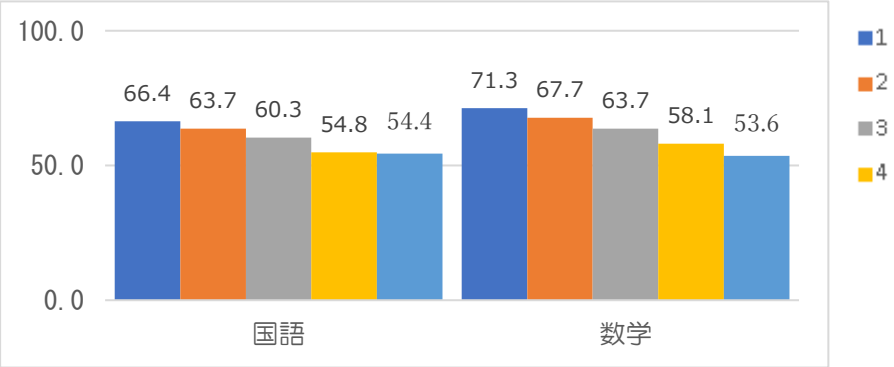
〇以下の質問項目に肯定的に回答している児童ほど、**２教科とも正答率が高い傾向**が見られた。

Q34：授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていた



１当てはまる ／ ２どちらかといえば、当てはまる ／ ３どちらかといえば、当てはまらない ／ ４当てはまらない

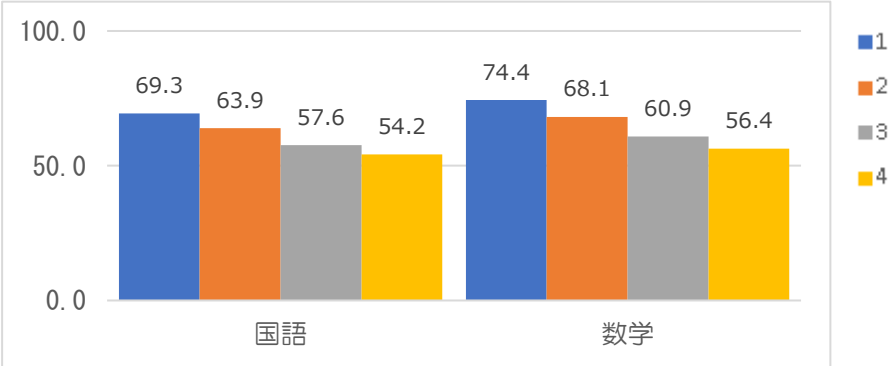
Q36：学級の友達との間で話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，広げたりすることができていますか



１当てはまる ／ ２どちらかといえば、当てはまる ／ ３どちらかといえば、当てはまらない

４当てはまらない ／ ５学級の友達との間で話し合う活動を行っていない

Q39：総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる

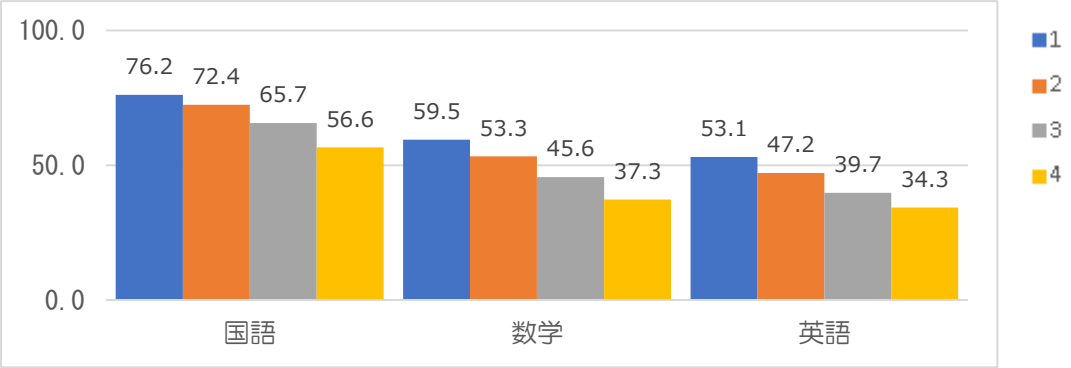


１当てはまる ／ ２どちらかといえば、当てはまる ／ ３どちらかといえば、当てはまらない ／ ４当てはまらない

【中学校】

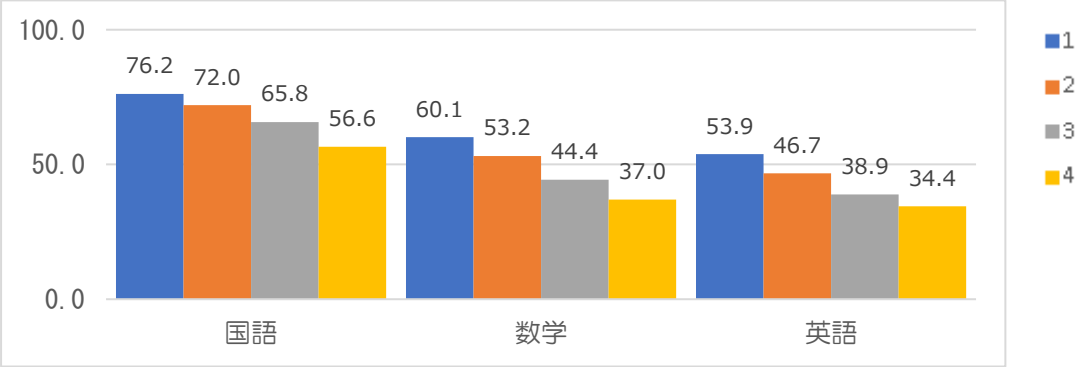
〇以下の質問項目に肯定的に回答している生徒ほど、**３教科とも正答率が高い傾向**が見られた。

Q38：授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていた



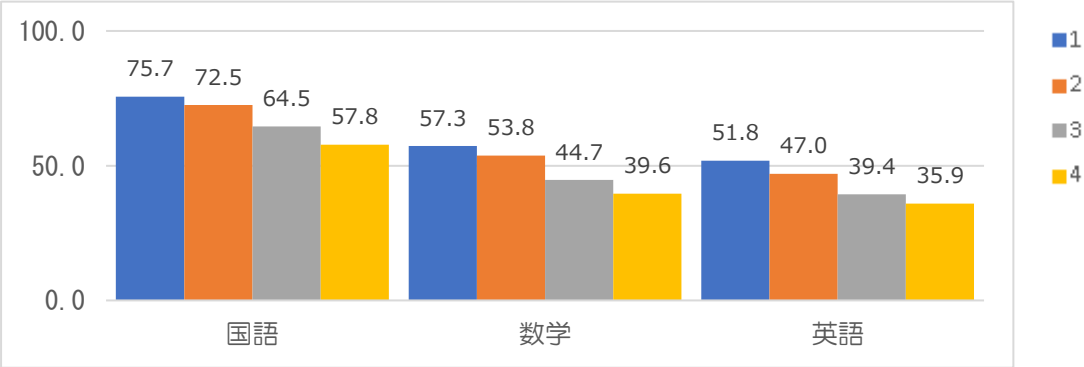
１当てはまる / ２どちらかといえば、当てはまる / ３どちらかといえば、当てはまらない / ４当てはまらない

Q41：学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができている



１当てはまる / ２どちらかといえば、当てはまる / ３どちらかといえば、当てはまらない / ４当てはまらない

Q43：総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる



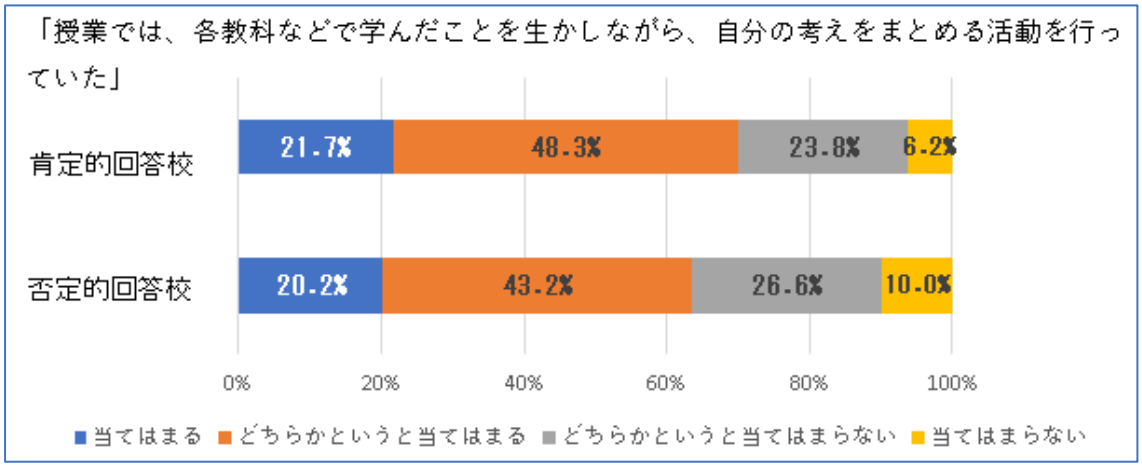
１当てはまる / ２どちらかといえば、当てはまる / ３どちらかといえば、当てはまらない / ４当てはまらない

学校質問紙と児童生徒質問紙のクロス分析

児童生徒質問紙項目と、学校質問紙項目について分析したところ、特に中学校において次のような特徴的な様子が見られた。

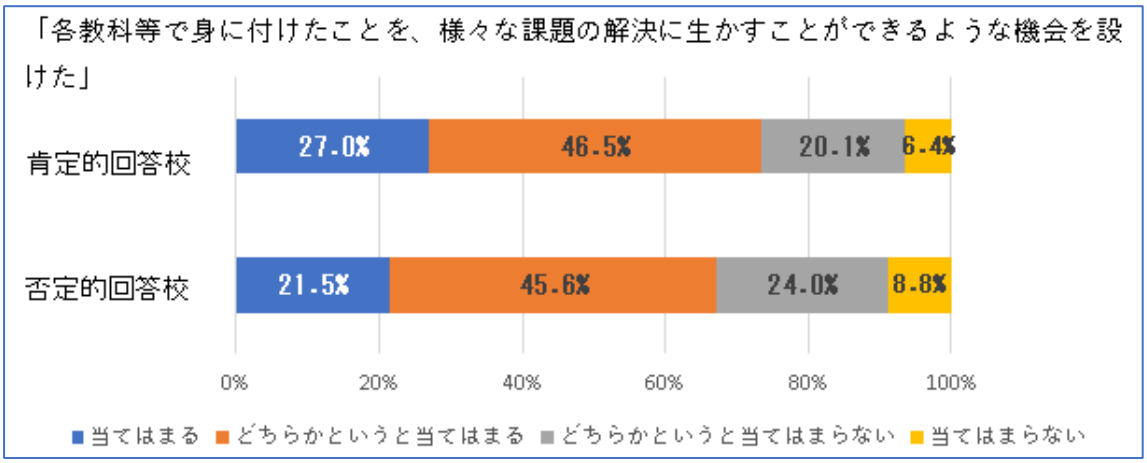
○生徒が言語活動をとおして各教科・領域の学習に取り組んでいる学校では、「38　授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか」に対して肯定的に回答している生徒が多い。

例）「学校質問紙21：言語活動について、国語科を要としつつ、各教科等の特質に応じて、学校全体として取り組んでいる」に対して、肯定的に回答した学校と否定的に回答した学校の「38　授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか」の集計結果比較



○教科横断的な視点や、探究的な学びの視点を取り入れることが意識されている学校では、「43　総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」に対して肯定的に回答している生徒が多い。

例）「学校質問紙35：各教科等で身に付けたことを、様々な課題の解決に生かすことができるような機会を設けた」に対して、肯定的に回答した学校と否定的に回答した学校の「43　総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」の集計結果比較



２　令和５年度全国学力・学習状況調査

調査結果を踏まえた学力向上７つの提言

提言１　単元などの内容や時間のまとまりを意識した指導の充実

１単位時間の授業は大切です。しかし、そこでの学びが児童生徒の中でつながらなければ、学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりして自身の学びや変容を自覚することができません。「質問項目（小）34（中）38：授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていた」の項目は、学力との相関が見られました。児童生徒が学習した内容について自ら振り返り、次の学習に生かしていくためには、教員自身が１単位時間の授業計画だけでなく、単元などの内容や時間のまとまりの中で、育成したい資質・能力を明確にした上で指導計画を立て、児童生徒の学びをつなげていくこと、変容を自覚させていくことが必要です。それはまた、教科の「見方・考え方」を働かせることにも結び付くはずです。これらの改善が、児童生徒に教科を学ぶ意義を実感させ、「学びに向かう力」を育むことにもつながります。

提言２　指導と評価の一体化の充実

「主体的に学習に取り組む態度」の評価について、どう評価したらいいのかという方法論が話の中心になっていないでしょうか。評価の前提となる、育成を目指す児童生徒像は明確でしょうか。学習評価は、教師が自らの指導のねらいに応じて授業での児童生徒の学びを振り返り、学習や指導の改善に生かしていくこと、そして、その指導のもとで児童生徒が学習したことの意義や価値を実感できるようにするために行うものです。育成を目指す児童生徒像をしっかりとイメージした上で、現時点での児童生徒を冷静に分析し、指導を通して児童生徒がどう伸びたのか、どう変容したのかを見取り、一人一人にその成果を返していくとともに、教員が自らの指導を改善していくという認識が重要です。

提言３　認知能力と非認知能力の一体的な育成

認知能力と非認知能力は一体的に育成されるべきものです。非認知能力の定義は諸説あるので、その定義について議論することよりも、各校の教育目標と照らし合わせ、育成を目指す児童生徒像に則って「特にこういう力を伸ばそう」と決めることが必要です。そして、校内研修等を通じて全教職員で共通理解を行い、学校の教育活動全体を通して育成を目指していくことが大切です。

提言４　調査対象教科だけでなく、すべての教科及び領域での指導の充実

「質問項目（小）39（中）43：総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる」、「質問項目（小）38（中）42：授業で学んだことを、ほかの学習で生かしている」に肯定的な回答をしている児童生徒は、学力と相関の見られた質問項目に肯定的に回答している傾向がありました。教科の中だけで学びが閉じられることがないように、すべての教科及び領域で言語活動を位置づけた学習が大切です。

また、グループで話し合う、考えたことを文章に書く、他人にうまく伝わるよう考えながら説明する等について、各教科・領域等でどういう工夫ができるかを考えることが、どの教科にもプラスの効果を与えていることも示唆されています。このとき、担任や各教科担当だけで考えるのではなく、学校全体で方針を持ち、全教職員で共通理解した上で指導することが必要です。

提言５　学んだことを生かし、自ら課題を設定し解決する課題解決型の学習の充実

「質問項目（小）33（中）37：授業では、課題の解決に向けて自分で考え、自分から取り組んでいた」も各教科の平均正答率と相関がみられます。自ら課題を設定し、解決していく課題解決型の学習を通して各教科で学んだことを実際に使いこなし、そこで得た学ぶ力を再び教科の学びへと生かしていくという探究の機会を充実させることが大切です。

提言６　生徒指導の機能を強化した学級経営

生徒指導の機能（自己決定の場、自己の存在感、共感的な人間関係、安全・安心の風土）を活かした学級経営が大切であることは言うまでもありません。教員の児童生徒への適切な言葉かけや働きかけによって、学級は落ち着きます。児童生徒一人一人が、学級が楽しい、安心できるという感覚を持つ中で、他者の意見を聞いて自らの考えを深めたり、相手に伝わるように工夫しながら発表をしたりといった学習活動を行っていくことが大切です。

提言７　実践的な校内研修、指導の振り返りと改善の充実

実践的な校内研修を行うこと、校内研修の質を向上させることを通して、学校としての「指導力」を組織的に向上させることが必要です。学校として何を大切にしているのかを全教職員で共通理解し、児童生徒の現状を正確に把握し、どうすればねらいに近付けるのか仮説を立て、全教職員がそれぞれの立場から一人一人の児童生徒に適切な指導・支援を行い、指導の成果について検証し、指導改善を行うことが重要です。

学校の教育活動について、教員の感覚と客観的データの両輪から児童生徒の伸びと変容を把握し、指導を振り返り、改善していく学校文化を醸成していくことが必要です。令和５年度から始まった「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」の結果データも最大限活用してください。